

風土



月の客

神蔵器

稲稔る白洲次郎のダンディかな

一歩前 二歩前 進門火焚く

昼眠り夜は目覚めて月の客

寝たきりの我に蝶来てとんぼ来て

硯洗ふてのひらほどの月光に

盆の来る玉音放送叩きづめ

桂郎の生れし八月六日かな

死ぬならばひとりがよくし星月夜

智慧ぬすむごと一房のデラウェア

東京のへそてふ杉並蚯蚓鳴く



竹間集

同人作品



初 鴨
柴田 久子

鴉の木鴟の木高し鬼子母神
菊切つて銚くもらす朝かな
ローマ字の祖父の日記や秋彼岸
世界地図広がる少年色鳥来
ラ・フランス不治退院の夫に剥く
初鴨の暮れゆく声をつなぎあふ
色鳥の好む高さや漱石碑

獺祭忌

中村 洋子

子規庵 三句
パリからの子規への手紙獺祭忌
浅井忠の画
デッサンの子規の横顔小鳥来る
子規忌かな「生きて己を目指しをり」
大龍寺 三句
子規の墓葉波山の墓へ色鳥来
子規の墓八重の墓にも竹の春
供華とする子規の墓へと石榴の実
山の手線に踏切ひとつ桐一葉

大文字
橋添やよひ

縁に干す蕪村生家の唐辛子
かなかなや糺の森の古本市
秋風の吹き残したる浮御堂
湖へ向く千体仏や鳥渡る
しびしびと遣らずの雨の大文字
鉦叩き自由と孤独なひまぜに
蓮は実に相見謝絶の禅の寺

野分晴

浅田 光代

新涼や栞の紐をまつすぐに
晩年の母似と言はれとろろ汁
白雲のきれぎれとなり鷹渡す
鷹を追ふレンズに蜻蛉がいつばい
考への尽きたる蜻蛉発ちにけり
鬼柚子のどかと居座る日和かな
巾着袋に飴ころころと野分晴

庭園美術館

柿沼 盟子

大き窓多き宮邸秋高し
木の実降る旧宮邸の入口に
北の間の四角いろいろ秋澄めり
漆喰に間接照明秋深む
ペランダの青袖褪せず秋のこゑ
築山に色なき風の吹き上がり
白秋や硝子に揺らぐ人の影

月祀る

高村 令子

朝厨先に目覚めしちちる虫
抱いて入る木犀の香と新聞と
次々と霧に穴明け出勤車
あめんぼにぐつと擱まれ山の池
良夜かな此の遊星に水と棲み
甘党も辛党もぬて月祀る
九条論議の闇の片隅ちちる虫

零余子摘む

土井 三乙

本買ひに影も蹤きくる秋暑かな
鰯雲ふるさとにダム出来るとふ
泣き止まぬ赤子に釣瓶落しかな
星飛ぶや海に突き出て砲台趾
山の子に山の空あり零余子摘む
摘むよりも拾ひて零余子手に余る
零余子摘み来て外井戸に手を洗ふ

竹間集作家特別作品

北斎の波

中村 洋子

海と空のひとつ台風過の晴るる
吹き晴れて海の匂ひの初嵐
流木を引きずる秋のしらしらと
白き帆の数定まらぬ秋の風
流れゆく潮を見てをり秋日和
次の波つぎの波待つ秋日傘
鳥渡る波打ち際は弧を描く
流木のとどまる河口稲びかり

海原にこころ放ちて秋高し
秋の浜小舟の舳先砂の引く
北斎の波立ち上がる野分後
流速に乗る一瞬の木の実かな
河口いま潮のぼり来る鱗雲
見晴るかす薩埵峠の秋の富士
きりぎしの高きに萩の花垂る
正面に美保の松原いわし雲
追ひ風の七百キロを鷹渡る
行く秋や左まはりに鳥の舞ふ
南下する伊良湖岬の鷹柱
一舟の出て行く釣瓶落しかな

山河集

同人作品



神蔵 器選

岩だたみ五十歩百歩の葉月潮

落合 絹代

行き逢うて森の婚礼色鳥来

大和古寺の塔のはるか鳥渡る
子規庵の庭に付けしかみのこづち
秋晴の大きな屋根が孔子廟

毛筆の父の文がら子規忌かな

鈴木 庸子

方位盤に止まり直して赤とんぼ

秋ともし耳ある和紙の葉かな
阿弥陀寺に僧の琵琶聞く一葉かな
単線の駅舎に鶏頭明かりかな

咲き繋ぐ朝顔の明日思ひけり

杉田 春雄

紐長き裸電球鬼灯売
百歳の母の爪切る望の月

生者老い亡者は若し門火焚く
力抜く肩に蜻蛉来て休む

随伴の曾良旅日記露ふかし

石井ケエ子

露けき日笈の小文を習ひをり
芭蕉読む八潮橋より秋の風

日蓮の入滅の寺鳥渡る
良夜かな友の一人は更科へ

もののふを偲ぶ小径やちろる止む

森屋 慶基

夕月の水鏡より風の綾

西沼に絵巻のやうな小望月
月見酒吾れ家衡の血筋かと
清衡も家衡も見し今日の月

◇特別作品◇

ロシア紀行

奥田 茶々

ロシア旅行の朝に加へしサンガラス

美術館へ続く棧橋水澄めり

エルミタージュ美術館 三句

立ち止まるラファエロ回廊秋の声

秋澄むや金の孔雀の大時計

朝寒やマトリョーシカは頬染めて

菩提子やロシアガイドの赤き傘

夏の宮殿

ピョートル大帝の秋の噴水踊りけり

アカペラの五人の聖歌秋気澄む

煌めける黄金の間に秋日差す
秋うらら壁に六トン琥珀の間
双頭の鷺の玉座や天高し
バスタブの栓の締まらぬ夜長かな
黒パンに熱きボルシチ夜寒かな
モスクワ着の深夜特急そぞろ寒
起伏無きロシアの大地百千草
童話めくワシリー寺院小鳥来る
赤の広場
目で交はず異国の会話秋うらら
ウスペンスキー大聖堂
壁覆ふ黄金アイコン秋愁ひ
ななかまど湖に影置く修道院
窓閉ざすシベリア上空星月夜

風土集



神蔵器選

子規庵の庭へ誘ふ秋の蝶 東京 奥田 茶々

子規庵の飛び石に罅秋の蝶

上着脱ぐ子規庵三畳間の残暑

ほつほつと子規の分身鶏頭咲く

艶のある自作の塑像子規忌かな

とんぼ来る伊豆高原の絵本館 伊東 吉永すみれ

家康の奉刀二振り秋気澄む

爽涼や伽藍百畳開け放ち

母と言ふ一字の温み門火焚く

灯台は海の通ひ路鳥渡る

竹叢の奥まで澄みて彼岸花 津山 生田 作

秋天へ風昇りゆく楠大樹

口中に砕く塩飴稲架襖

台風のそれで真上の空開く

天高し畦に寝て見る蝶の舞

帰燕後の抜けたる空の大櫓 津山 生田恵美子

秋の蝶翔たんとしては地を流れ

戸口まで残る轍や秋の蝶

峰の松等間隔に秋澄めり

稲雀散つて二手に空分かつ

みちのくの賢治の里の天の川 川崎 井口ふみ緒

上りては賢治記念館女郎花

八朔のきのふと違ふ山の色

防災の日のトンネルを一つ抜け

大学生の表紙シリーズ桐一葉

誰がために急かせる桜紅葉かな 福生 雨宮 桂子

いわし雲こころここにあらざかな

足元の危ふくなりし曼珠沙華

ままならぬ三行日記鳥渡る

流木の水に打たるるままの秋

宮城野の秋茗荷とて賜ひける 東京 石井ケエ子

酸橋来て秋刀魚の夕餉とはなりぬ

木犀の香や思はずも歩を止めて

園庭に稔田ありて案山子立つ

鉄棒に稲の束干し九月尽

めぐりくるものに忌日や虫の夜

近づきて鼓動をきけり糸とんぼ

播粉木のにぎりの艶や秋彼岸

紅のぞく大降りあとの生姜畑

一夜城へ吹き上ぐ風や青みかん

喜寿傘寿の間の月日爽やかに

今年はも子規の墓前に鉦叩

子規

鶏頭の種を賜はる佳き日かな

草雲雀道一本の左右より

手土産に庭の茗荷の花も添へ

鉦叩終着点は子規の墓

背伸びして子規の糸瓜の重さかな

今までと違ふ案山子の出来上がり

鳥渡る母校は川を一つ越え

そよ風の道に巢箱や草の花

神住むといふ摩周湖の水澄めり

川崎

水井千鶴子

川崎

鈴木庸子

大和

落合絹代

東京

中嶋陽子

てのひらに団栗拾ふ墓参道
月光の射し来る閨の窓あかり
六十年妻の座にあり新生姜
灯火親し真砂女生家の置ランプ
露けしや家庭医学の本を積み
新松子青々香淳御陵かな
過去帳のはじめは聖武天の川
洞窟にワインの眠る葉月かな
遠くより葉月の波のうねり来る
蟻の列守一の絵より抜けて来る
米を磨ぐ男ひとりに秋の暮
交番に「在所」の札あり秋祭
実のなりて地に着くほどの実紫
名月や眼下は清き能楽堂

法隆寺観音

五條

上辻蒼人

京都

杉本葉王子

川崎

内藤静

川崎

遠藤逍遙子